

【解説】

暖冬のため、製作を中断していた『海に降る雪』を企画変更、ATGと提携で製作再開した、原田美枝子プロデュース作品。

真昼は過ぎてしまった。だけど太陽は、まだわずかに西へ傾いた位置で、照っている。太陽が沈んでしまったら、闇が訪れるのは分っている。でも、沈んでからのことを心配したってしょうがない。どうせ分かりやしないんだ。だから——、太陽が照っているうちに、やりたいことをやっておこう。とりあえず陽が沈むまでには、4、5時間あるから……。

彼等は、そう思う。暴走族、ディスコ・フィーバー、竹の子族が生まれる。本当に欲しているもの、本当にやりたい事は何なのか分からず、何か違うな、と頭の片隅で一点醒めながらも、とりあえず暴走に、踊りに、目立とう精神に走るヤングの群れ。己れの判断と決断で、自由に動かすことができるのは、インベーダー・ゲームだけだったというサラリーマン。

【キャスト】

- 島崎美英(千里)……原田美枝子
- 半崎市雄……………宇崎竜童
- 三崎栄介……………原田芳雄
- 花森咲夫……………名古屋章
- 峰山隆……………草野大悟
- 下村竜一郎……………天本英世
- 宗形八郎……………三國連太郎

【スタッフ】

- 製作……………市山達己
- ”……………原田美枝子
- ”……………佐々木史朗
- 企画……………多賀祥介
- 原案……………刹那
- 脚本……………神代辰巳
- ”……………刹那
- 監督……………神代辰巳
- 撮影……………押切隆世
- 照明……………秦野和人
- 録音……………米山靖
- 美術……………大谷和正
- 編集……………山地早智子
- 音楽……………千野秀一
- 助監督……………高橋安信
- 製作主任……………熊田雅彦
- スチール……………渡辺昌二

カラー・ビスタビジョンサイズ
上映時間・2時間18分
市山パースル&ATG提携作品



’80年代は、何となく世紀末、終末感の漂う〈午後2時の年代〉なのだ。その中で、1人の女と2人の男が一生懸命プレイする、メンタル・ゲーム。そしてその姿は、どこか可笑しくて物哀しい。

その3人を〈午後2時の年代〉にブチ込んだ。そこから、どんな面白さが出てくるか。何が飛び出してくるか。

レコードは、退屈したら、疲れたら、ピック・アップを上げればいい。本は一旦閉じればいい。映画はそうは行かない。ならば最低限最後まで面白く見せるというのが、創る側のサービスではないか？そんな所からスタートした“面白探し”が、この脚本（神代辰巳・刹那）になった。

原田美枝子、宇崎竜童、そして原田芳雄。この3人が作り出す、奇妙な三角形の落とし穴に近づいて来る三國連太郎。誰が誰に操られているのか。

監督・神代辰巳が、始めて枠のない場所で取り組むストレンジ・シネマ。

ミスター・ミセス・ミス・ロンリー

特別観賞券1100円発売中

12月20日(土)ロードショー

有楽シネマ (201) 3066

国電有楽町駅中央口前

当日
一般
1400円
学生
1200円
の
ところ
円



ミスター・ミセス・ホモ・ロンリー

不思議で
おかしな
よくある話



世界はひとつ
人類みな他人

神代辰巳監督作品



【ものがたり】

市雄と美英の出会いは、奇妙だった。いつものように店が終った深夜、市雄が車で帰宅する途中の電柱に、女が手錠をかけられたまま、くくりつけられていた。それが美英だった。美英は千里と名乗った。二人の奇妙な暮らしが始まった。

三崎は、出版社の辞典編集部勤めている。百科事典を20数年間、繰り返し繰り返し読み続け、丸暗記してしまったような男。今日もまた、百科事典に目を落としている。

“三信商事のダミー〈北川産商〉カズノコ倒産へ”
“北川社長、1ヵ月前から、15億円抱え失踪”
の記事が、ある日の新聞に出た。

奇妙な二人暮らしの中で、千里と市雄は、お互いの中に自分と同じものを嗅ぎ、急速に接近して行く。

再び新聞の記事。
“北川産産社長・北川俊久を、横領罪で指名手配”

三崎と下村が、薄暗い店の片隅で、その新聞の記事について話し合っている。

「北川は、無事ヨーロッパへ着きました」と下村。うなづく三崎。

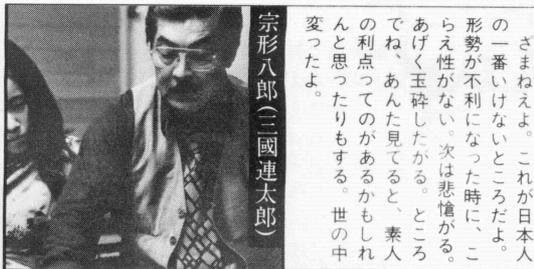
市雄は花森に、赤坂で店を一軒まかされている。千里もそれを手伝うことになる。が、ミスを犯し、国籍のない市雄は、店を閉めなければならなくなる。千里と花森の言い争いの最中、市雄は千里を連れ出し、出会った時と同じ場所に、電柱に手錠でくくりつけ、棄ててきた。市雄と花森の間には、市雄がそうせざるを得ない、何かがあるようだった。

その千里を拾ったのは、三崎だった。それは千里の方に、何か隠れた意図があるような出会だった。三崎が千里を家に連れ帰った時、市雄が現われた。こうして三人が出会った。

三崎と下村が話している。
「三崎さん、私に内緒にしていることがあるね。あなたがやった15億円、全部札の番号、控えてあったそうじゃないか。私しやこの仕事から、手を引かせてもらう。ひとつだけ餞別にいいネタをあげますよ。半崎市雄って男を拾いましたね。あいつは宗形っていう、べら棒に金持ってる男を、客に持っている」
云い残して、下村は去って行った。

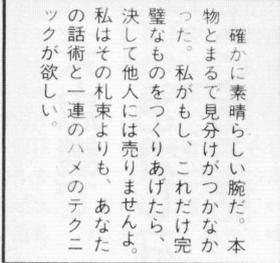
職のなくなった市雄と千里に、三崎は15億円を使える金に換える手伝いをしないか、と持ちかける。三人は仕事の分担を決め、市雄と千里は、宗形を探し始める。

千里はうまく宗形の所へ、入り込んだ。ジワジワと三角形の罠に近づいて行く宗形。そして、成功したかのように見えたのだが、そこには、もうひとつの落とし穴が待ち受けていた……。



宗形八郎(三國連太郎)

ざまねえよ。これが日本人の一番いけないところだよ。形勢が不利になった時に、こらえ性が無い。次は悲憤が、あけく玉砕したがる。ところでね、あんた見ると、素人の利点つてのがあるかもしれんと思ったりもする。世の中変ったよ。



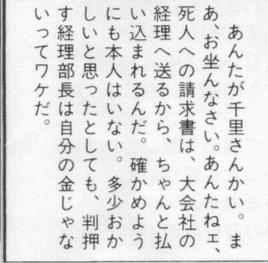
下村竜一郎(天本英世)

確かに素晴らしい腕だ。本物とまるで見分けがつかない。私の方も、これだけ完璧なものをつくりあげたら、決して他人には売りませぬよ。私はその札束よりも、あなたの話術と一連のハメのテクニクが欲しい。



花森咲夫(名古屋屋章)

この仕事は、捕まることを前提に組んであります。彼はつかまったらしても、絶対私とのことはしゃべらないと思いますよ。あの人にとつちや、もう、あの金しや頼れるものはないし、それにあの人の怒りは、会社を倒産させた親会社にむいているんです。



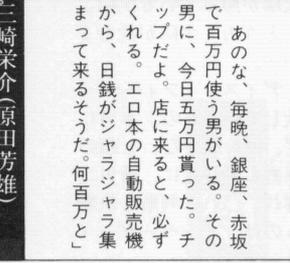
三崎栄介(原田芳雄)

あ、お坐んない。あんたね、死人への請求書は、大会社の経理へ送るから、ちゃんと払い込まれるんだ。確かめようにも本人はいない。多少おかしかったとしても、判押す経理部長は自分の金じゃないうってワケだ。



半崎市雄(宇崎竜童)

行きなよ。さつさと行きなよ。そのかわり、振り向くんじゃないよ……。おしえてあげるよ。手錠のイニシャルは、男のイニシャルだよ。こいうやって私を置き去りにして行った、私たちのイニシャルだよ。あんたも刻んで行きなよ。



島崎美英(千里)(原田美枝子)

あ、お坐んない。あんたね、百万円使う男がいる。その男に、今日五万円貰った。チップだよ。店に来ると、必ずくれる。エロ本の自動販売機から、日銭がジャラジャラ集まって来るそう。何百万と

弱いもんが動き出すと何かが起こる

神代辰巳(監督)

21才の原田美枝子が自分の映画を作ろうということにひどく心を動かされて、この映画の製作に参加しました。シナリオも原田美枝子と彼女のマネージャーの市山達己が共同で書いたオリジナルです。細かくふれることは避けませんが、彼女達がこれだけの映画を作りあげた執念と、創造に賭ける情念に心からの喝采と敬意を表しておきます。

ほんとに何かに執着すると、ひどくしんどいものなのです。そんな時、自分をしんきくさく思わないために唄を歌います。この映画もある意味で彼女達の映画作りの執念のパロディと云っていいのかもしれませんが。そしてその唄は「弱いもんが動き出すと何が起こるかかわらない」と云う唄です。この映画のモチーフにもなっています。映画の中で作中人物達はごそごそ動き廻ります。あまりかっこよくありません。そして、この唄は弱いもんが動き出しても殆ど何も起こらないと云うことを知り過ぎている作中人物達のアイロニーでしかありません。それでも、原田美枝子が二度も三度も口ずさみます。ごそごそ這い廻っていると、どうしても自分の唄が欲しくなるからです。自分だけごそごそしてるんじゃないから、余計に唄いたくなるのです。でもこれは団結の歌ではありません。団結を遠い昔に忘れた者の、夢を夢であると承知したもののアイロニーです。でも引かれものの小唄ではありません。ごそごそ生きることに執着しているからです。引かれ者の小唄と違うところはいつかはきっと、弱い者が動き出すと、何かが起こることを心のどこかで夢見てる者の唄だからです。そう云う意味でも、この映画のプロデューサー達にもう一度敬意を表したいと思えます。

命がけの遊び = 映画をつくること

原田美枝子

面白い映画をつくりたい、という思いは常にあります。誰がどんな方法でつくりたいと関係なく、とにかく参加して燃焼したいのです。“面白い映画”の定義はよくわかりませんが、心ときめくような脚本と監督に、めぐり逢いたいです。

けれど、いつか誰かが企画してくれるだろうと期待して待っていても、心ときめくようなめぐり逢いはめったにないのです。せつかく今まで映画と関わってきたのに、待ちくたびれて腐ってしまうのは、たまりません。ならば、自分達でやってみよう、ということになりました。

昨年(79年)『海に降る雪』を企画して、クランクインまでこぎつけたのですが、暖冬異変のため雪が少なく、金銭的な事も含めて諸々の問題が重なりやむなく中止しました。私達のやろうとしている事も“海に降る雪”のように積もらないのかなア、などと思ったりしましたが、そのまま引き下がる事は



できません。新たにオリジナルで行くことに決めました。グチャッていても始まりません。

約8ヶ月の準備期間があつて、クランクインの当日、新宿駅西口にロケバスが待機しているのを見た瞬間、「私達のロケバスがいる!! やつとこれから本当に始まるんだ」という思いでいっぱいでした。

1本の映画が完成するまで、多くの人と多額のお金が動き、そして実に様々な作業がある事を初めて知りました。命がけて遊ぶ人達の映画をつくりたいと思いつきながら、映画をつくること自体、命がけの遊びのような気がしました。

映画の魅力にとりつかれてしまうと、どうしてもやめられなくなります。次にはもっと良くしよう、その次には前よりも更に良くしよう、というように。

沢山の人が観てくれるといいなと思います。もう1本、もう1本と、映画をつくりつづけたいから。

公開されたら、劇場へ観に行こうと思っています。観てくれた人が、この『ミスター・ミセス・ミス・ロンリー』を、どんな風を感じるか、その反応を肌で感じてみたいから。

一作で終わらずに、つくり続けられたら最高です。

